令和５年度　第６回京丹後市の新たな教育・人材育成の在り方に関する検討会会議録

１　開催日時：令和６年１月１６日（火）１５時００分～１７時００分

２　開催場所：京丹後市役所大宮庁舎　４階　第２・３会議室

３　出席者：

浅井　智美　委員

井上　知英　委員

今度　義則　委員

岡田　泰行　委員

荻　　弦太　委員

古賀　稔邦　委員

髙橋　一也　委員

田茂井 勇人　委員

竺沙　知章　座長

長井　　悠　委員

中川　　哲　委員

牧野　光朗　委員

ヤング　吉原　麻里子　委員

塩川　達大　オブザーバー

田中　　努　オブザーバー

（欠席者）

岩本　　悠　委員

事務局：

京丹後市市長　　中山　泰

京丹後市副市長　　濵　健志朗

京丹後市教育委員会　教育長　　松本　明彦
京丹後市　市長公室長　　川口　誠彦
京丹後市教育委員会事務局　教育次長　　引野　雅文
京丹後市市長公室　政策企画課長　　松本　晃治
京丹後市教育委員会事務局　学校教育課長　　川村　義輝
京丹後市教育委員会事務局　教育総務課長　　西村　隆

４　議　　事

（１）最終まとめ（案）について

（２）その他

５　公開又は非公開の別　　公開

６　傍聴人　　２名

７　要旨

教育次長：こんにちは。本日は第６回京丹後市の新たな教育人材育成の在り方に関する検討会を開会させていただきます。委員の皆様におかれましては、本日もご多忙の中ご出席をいただきまして誠にありがとうございます。私は教育次長の引野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。それでは開会にあたりまして中山市長よりご挨拶を申し上げます。

市　　長：皆さんこんにちは。今日は第６回の京丹後市の新たな教育人材育成のあり方を考える検討会ということで、竺沙座長をはじめ委員の皆様にお集まりをいただきました。また、Ｗｅｂを通じてもご参加をいただき本当にありがとうございます。まず、能登で大変な地震があり、大勢の皆様が被災し、また犠牲になられてましたことを、心からの哀悼を捧げると同時にお見舞いを申しあげたいと思います。さて、この検討会はちょうど１年近く前、昨年の２月に準備会を立ち上げていただいて、準備会２回、それから本検討会も今日で６回ということで、計８回と、多くにわたり委員の皆様の豊富な知見を基に精力的なご審議を賜ったところであり、今日は最終的な取りまとめをいただけるところまでして

くださいました。心からの感謝を申しあげたいと思います。昨年、地方のコロナ対策が終息しつつあるという状況の中、地方創生が再スタートしてきたそのような時期にあたる震災を、皆さんの力で乗り越えてきたところであり、同時に一方で直近の状況として、日本全体人口に関してさらに厳しい観測があるような話も出てきたわけです。そういう状況だからこそ、私は次世代を託す子どもたちを中心に据えた教育や子育てやまちづくり、国づくりの必要性がますます要請されると思っております。一方で時代はＤＸの推進をはじめとして、絶えず変化し、流動しているというと思うわけですが、そういう時代に対応しながらも、同時に変わらず地域にしっかり立脚をし、子どもたちを中心に据えた様々な取組をしっかりとしていくということが大切である。舞台は日本から世界へ多彩に広がりが求められているという状況でもあると思います。そのような取組を地域に根づいて取り組んでいくということが求められるという背景の中でいろいろな議論をいただき、子どもたち一人一人の可能性を無限に引き出していくための４つの具体的なプロジェクトをはじめとし、最終案として落とし込んでいただきつつあるということは、地域として、この上ない意義の深さであると思いますし、これは未来の京丹後にとっても大変意義深いことであると思っております。最終案を取りまとめいただいた上は、これを教育委員会ともどもに市としてしっかりと受けとめて、これを施策として、果敢かつ丁寧に生かしていくということが大切だと思っております。同時に次期の教育大綱或いは教育振興計画への反映についても、しっかりと取組をして参りたく、そしてその上で、丁寧かつ果敢に取り組んでいかなければならないなと思っております。この間の精力的な、本当にご負担ご苦労いただきながらの取りまとめに感謝申し上げます。御礼を重ねて申し上げてご挨拶とさせていただきます。また今後ともご指導どうぞよろしくお願い申し上げます。今日はありがとうございます。

（1）最終まとめ（案）について

座　　長：皆さんこんにちは。どうぞよろしくお願いいたします。今日は最終回ということで最終の案を取りまとめが議題になりますので、早速資料１の最終まとめ案につきまして、事務局から説明をいただきたいと思います。

事　務　局：（事務局より説明）

座　　長：ありがとうございました。ではただいまから、最終まとめ案につきまして、細かいところも含めて詰めた議論をできたらと思います。まずは、目次に沿いまして特に１の問題意識や、２の教育、人材育成の方向性のところで何かわかりにくいところや、疑問点、あるいはご意見ございましたらご発言をお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

委　　員：１２ページのテキストマイニングのＷｏｒｄクラウドのところの一番大きな「ict」の文字ですが、ＩＣＴは略語ですので、小文字ではなくて大文字の「ＩＣＴ」が正しいのではないでしょうか。細かい点申し訳ありません。

座　　長：大文字の方がいいだろうと思います。

委　　員：あと細かいことでもう１つありますが、同じところの一番下のところに四角でくくった中の「異学年」という言葉がありますが、他のページでは、「他学年」となっていているので、どちらかに統一したほうがいいだろうと思いました。

座　　長：ありがとうございます。違う意味にとられる可能性もありますし、おそらく自分とは異なるということを意図とされてると思いますが、他学年の方がわかりやすいかと思います。先ほどの「ict」の部分は、テクニカル上小文字しか表記できないということを今、事務局の方からご説明をいただいてますので技術的に可能かどうかわかりませんけども、何らかの方法はないか検討してみるということですので、そこはご了解いただければと思います。直らなかった場合はご容赦いただきたいと思います。

委　　員：了解しました。

座　　長：誤解を生まないように、「ict」という文字を取ってもいいかもしれませんけれども、そうすると核がなくなってしまうということですかね。一番大きい文字なので、一番発言が多かったということですよね。工夫をどうするかを考えないといけないだろうと思いますけど、補足説明をしていくしかないかなと思います。今のような細かいところでも結構です。いろいろな方に読まれるということがございますので、どんなことでも、少しわかりにくいとかこうした方がいいというご意見ありましたら、出していただきたいと思います。いかがでしょうか。また最後に全体を通じて、ご意見を伺うところを設けたいと思いますので、一番中心になります具体的な取組というところを進

め、議論をしていきたいと思います。この部分につきましては、いろいろな委員のお立場でそれぞれのご専門から、具体的なご意見、ご提案をいただき、こうした案にまとまってるかと思いますけども、その中で、特に皆さん方が大事だと思ってることが入ってなかったり、表現が少し違うのではないかということであったり、疑問点がありましたら出していただけばと思います。ぜひ入れた方がいいんじゃないかということがありましたら、まだ間に合いますのでご意見をいただければと思います。オンラインのご参加の皆さん方もできれば声を出していただけるとありがたいですし、手を挙げていただければ多分拾えるかと思いますけども、よろしくお願いいたします。委員ございますか。

委　　員：１５ページの「保幼少中」の漢字が違います。

座　　長：初歩的なミスでしたけれども、少ないではなく小さいです。そういうのをどんどん見つけていただきたいと思います。具体的な取組に関わることだと思うんですけれども、Sea Labo は今年２年目ということで、1 年目の反省も生かしながら、本格的に取り組んでいるところがあると思います。取り組んだことや実際の様子もご紹介いただきながら、それぞれ特にプロジェクト 1 に関わるところかと思いますけども、その辺りのご意見を、それと関わっていただければというふうに思っております。委員の方から、昨年 Sea Labo を実践された様子やそこで感じられたことなど、簡単で結構ですのでご報告いただいてよろしいでしょうか。動画の方も用意できるということですので、まず動画を見ていただいてからご報告をお願いしたいと思います。

（動画視聴）

委　　員：素晴らしい動画の製作本当に先生方ありがとうございました。スライドをシェアさせていただきますね。皆さんこんにちは。一般社団法人 SkyLabo を代表し、研究チームがまとめた２年分のインパクトレポートをもとに、成果や期待を手短にご紹介申しあげます。Sea Labo は本日、現地でご参加されてご出席されている事務局の方々の多大なご尽力で実施されているプログラムです。Sea Labo は、京丹後市教育委員会のビジョンをもとに、教育委員会の先生方とスカイラボが連携して実施しております教育プログラムです。デザイン思考を学びのツールとして、丹後学をベースとした STEAM 教育のカリキュ

ラムを地域の中高生のためにローカライズする努力を行っています。中高生は京丹後のサスティナビリティをテーマに、コミュニティの課題に当事者として関わるパートナーのお話にじっくりと耳を傾けました。デザイン思考とは、人間を中心に発想するというものづくりのアプローチです。何より重要なのは、作り手が固定概念をなくし、相手に寄り添うこと。例えば、障害者だからとか、高齢者だからと勝手に相手のニーズを決めつけず、例えば何がその人を温かい気持ちにさせたり、もしくはもどかしい気持ちにさせたりするのか。そういった丁寧な聞き取り作業を通じて、中高生たちは相手に共感をするエンパシーという力を育みます。こちらの生徒さんは、問いかけをたたみかけて、深掘りをすることの大切さと難しさを学んだそうです。次に、インタビューや観察から得た多様な情報を分析していきます。こちらの生徒さんは、チームのコラボレーションを通して、自分では思いつかなかった疑問や意見が聞けたと、そのことに学びを感じたそうです。パートナーさんへの解決策を生んでいくフェーズでは、型にはまらない発想を重視します。エンパシーを使ってパートナーのためにものづくりをするプロセスには、正解も不正解もありません。自由に伸び伸びと発想し、どんな意見でも否定することはせず、むしろ相手のアイディアに自分の発想を重ねていきます。チームで協力しながら、ひとまずやってみようよと思える意識づくりが重要になるわけです。決して否定せず、みんなで話し合い、悩みながら自分たちの答えを導き出せたとき、「こんなとらえ方があるんだ」という学びや、「みんなでひとつのことを導き出せた達成感を感じました」とこの生徒さんがリフレクトされています。さあ、プロトタイプづくりを通していよいよチームのアイディアを可視化させていきます。それまではユーザーに寄り添ったり、ニーズを抽出したりといった、頭を使う抽象的な作業を繰り返してきたわけですが、ここに来て、手を使ってひたすらmake(作る)という全く異なる作業を経験します。ワークショップを行うたびに、いつも生徒さんの瞳が生き生きとして、どのチームも盛り上がるのがこのプロトタイプのフェーズです。そうしてひとつのものが完成することや、常に考え続け、思考を停止しないことの大切さを学び直したという、非常に興味深いリフレクションも上がっています。一生懸命にチームで考えてプロトタイプを見せたところ、パートナ

ーさんから芳しい反応が返ってこないこともあるでしょう。こちらでは委員がニコニコされておりますけれども、そんなチームは、相手のニーズ寄り添い切れていなかったんだという重要な気づきを得ることになるわけです。対話と改良を繰り返していくことで、より深く人間（パートナー）と繋がり、人間中心のものづくりを体験したわけです。Sea Labo で生まれたプロトタイプを２つご紹介しましょう。「好きなことをしているから自分は人生が充実している」と語ったパートナーさんの、しかしながら極めて多忙な日常に思いを馳せたこのチームが発想したのが、４８時間時計でした。１日は２４時間だという通念を覆す THINK OUT OF BOX（箱から出た発想）そのものであり、ワークショップの効果の現れと捉えることができます。競合より連携で、地域の産業全体がともに育つことが大切だと熱く語っておられたパートナーにチームが作ったのは、掲示板ロボットひろせちゃんでした。この掲示板には、京丹後の様々な技術を持つ会社が自由に宣伝やメッセージを載せられるそうで、競争会社のテクノロジーも宣伝しながら、６本足でまちを練り歩く珍しい姿に、訪れた観光客が関心を寄せて、写真や動画でバズらせることで、京丹後の魅力がさらに世界に広がっていくと、チームメンバーたちは語っていたわけです。地域のよさを生きがいに発信することができる力というのは、検討会の最終まとめ案でも議論される横糸になります。丹後学をベースとした STEAM 教育のカリキュラムで、Sea Labo での学びが目指す人材育成に繋がっていく可能性を見てとることができるプロトタイプでしょう。満足度に対する調査では、多くの生徒さんにとって楽しく熱心に取り組むことができたプログラムであったことが明らかとなっています。さらに２年目においては、非常に強くこれらに賛成するという回答の割合が、１０ポイントから２０ポイントほど増加していることが特筆されるかと思います。1 年目のプログラムでは、マインドセットの変化、リーダーシップ、自身の成長に対する意識、京丹後の歴史や文化に対する意識という 3 つの側面でプログラムの効果が見られました。一方、右に挙げた領域においては顕著な変化が見られなかったため、オレンジで示した改良を２年目のプログラムでは行いました。その結果１５の項目で統計的に有意な変化が見られました。プログラムの効果を右に示した４つの側面にまとめることができます。２年続けて特に変化した項

目が多かったのが、京丹後の文化や地域に関する質問だったわけですが、２年目ではデザインを通してこの地域をより良くしていく、京丹後の強みを生かしてイノベーションを起こすという新たな項目でプラスの変化が観察されています。これはSea Laboで学ぶそのプログラムでの学びを京丹後の地域の強みに結びつけて、この地域へのアクションに繋げようとする、そう考える生徒さんが育っている可能性を示唆しています。これまでの検討会でもずっと議論されてきた人材像とも合致する傾向であり、着目すべき効果の１つと考えています。こちらの最後のスライドですが、Sea Labo の教育効果を青、今後の改善点を赤で２年間の比較で示しております。教育の効果において特出すべきは、社会問題の解決に理数系 STEAM 領域の職業が選択肢となりうると京丹後の中高生が考えるようになったこと、女子と男子は効果的に一緒に作業ができるんだという意識が高まり、また特定のジェンダーは STEAM が苦手なんじゃないかといった偏見の打破が起こったこと。人は持って生まれた能力に限定されることなく、努力次第で、いかにでも成長できるという、心理学者の方たちがグロースマインドセットと呼ばれている意識が醸成されていること。そして、デザインやイノベーションを使って、地域のためにアクションを起こそうという意識の変化でした。また改善点・今後への期待としては、チームとの交流というものが挙げられております。ただしこれに関しては、小グループだからこそ、内気な自分も意見を言うことができたという生徒さんも動かすグループでおられたもので、活動のバランスを考慮した改定が、来年度に向けて必要と考えられます。なお、教育委員会のご尽力によりまして、２年目はパートナーさん９名の職場訪問というものが事前に可能になりまして、多くの生徒さんたちが、アンケートの中で、Sea Labo の思い出としてこれを挙げておられ、大きな成果のあった取組であったということが考えられます。以上をもちまして、成果と期待について発表させていただきました。ありがとうございました。

座　　長：どうもありがとうございました。内容とか要点がすごくよく伝わってくるお話をいただきました。委員も際に去年参加されたかと思うんですけども、今の話も含め、お聞きになった感想でも結構ですし、参加されてどんなことを感じられたかお話いただいてもよろしいでしょうか。

委　　員：２年間両方参加させていただいて、最初お会いしてから、会うたびごとにその生徒さんがすごく積極的にもなっていくし、成長をすぐ感じることができて、本当にそういうお子さんたちが育っていくと同時にこの丹後から世界に向けていろんな発信ができて、素晴らしいなと思って心強く感じました。これはもう２年目も間違いなくそうでした。僕もちょっと慣れてきたところもあったので、余計に生徒さんと一緒にいろいろ取り組めて本当面白かったですし、何度も言いますけども、こういう子どもたちが育っていくっていうのは、非常に大事なことだなと思って、すばらしい学習内容、教育と感じました。ぜひ丹後に帰ってきてくれるようにと皆にも伝えましたし、外で学んだことを丹後に持ち帰ってくれて、さらにこの丹後が発展するように取り組んでいただけたらなということで僕もお話しさせていただいたところです。ありがとうございます。

座　　長：実際 Sea Labo としてやったことをそのまま学校ですべての学校で実施するというのはすぐには難しいかもしれませんけれども、少なくともその考え方やその成果をそれぞれの学校の状況に合わせて実施できたらというふうなことで捉えることができるかと思いますので、1 つの目指している取組のモデルというかイメージを委員の皆さんにも持っていただけたんじゃないかなと思います。今のような考え方、取組というのが、この報告書案のベースにあると思いますし、特に具体的な取組の中心になってるかというふうに思うんですけども、そういう観点から見たときに、現在のこの案について、もう少しこういう点を修正したりとか、この辺を強調したらいいんじゃないかっていうふうな、そんなご意見がもしありましたら、例えばそういったかたちでのいろいろなご提案ご意見をいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

委　　員：質問なんですが、よろしいでしょうか。私もずっと興味持っていて、本当はぜひ見学したいなと思っていたところではあるんですけれども、２年間の積み重ねで学びの効果としても、子どもたちの効果や、肌感覚で得られるものもどんどん向上していらっしゃるのかなと思うんですが、この青と赤の、ちょっとチャートの部分で、どのようにより良くされてきたのかなというところで、２０２２年のところでプログラムのペースっていうのが、書いてあって２３年はどうやらクリアされたような表示になってるいうとこなんですが、

何か具体にどんなふうにこのペースというものが課題となり、どうクリアされたのかなというところがちょっと気になって、ご質問させていただきたいなと思いました。

委　　員：ありがとうございます。これは実は非常に大きなチャレンジが１年目ございまして、３日間のデザイン思考ワークショップとして、準備を何ヶ月も費やして当日臨んだところ、最終日が嵐で急遽キャンセルということになってしまいましたので、教育委員会の先生方と一致団結をして、３日間を急遽一晩で２日にカリキュラムを書き換えて実験を行いました。しかし振り返ってみますと、これが Sea Labo にとって非常に大きな、素晴らしい実施の学びに繋がっています。どういうことかというと、やはり人生日々生きていく中で、私たちはすべてのことを想定できることはできないと。不確定な要素、未来に対してどんなふうに連携をして発想し対処していくか、そして対処できるという自信を自分たちが育てていけるかというプログラムでございましたので、それを大人の私たちが、京丹後の教育委員会の先生たちと Sky Labo 一丸となって、それを実施できたこと、子どもたちにその背中を見せられて、Sea Labo にとっては素晴らしい結果を産んだわけなんですけど、それがこのペースの変革に繋がっております。２年目はしっかりとデザイン思考を３日間でやりました。

委　　員：ありがとうございました。大変すばらしい思考の転換というか、背中を見せるというところで、２日に設計し直されて素晴らしいと思います。自分だったらどうかなんて、結構うろたえてしまうかなと。対処が大変だったかなと思います。大変理解できましてありがとうございます。

座　　長：２年目は１年目のような想定外のことは起きなかったんでしょうか。

委　　員：２年目もいろいろございました。おられる委員の方たちも、きっとたくさんのことを思い出されるかと思いますけれども。「大丈夫か、大丈夫か」と毎日言いながらも、曖昧さとうまくダンスをするというマインドセットを学べたかと思います。

座　　長：おそらく、きちっと最終日まで提案できるだろうかっていう不安をぎりぎりまで抱えながら、最後まで頑張られたのかなっていうふうな印象も持っておりましたので、下手に支援せずに、本当に踏ん張られた。みんなが踏ん張っ

たので、最後１つの大きな成果、作品が作られたのかなということも、私も最終日に参加させていただきそんな雰囲気を感じたところです。ですので、予定した通りには動かない中で、その場その場で何が必要かというのを考えながら、また子どもたちと一緒にいろいろなことを試行錯誤しながら取り組んでおられたんだろうなというなことを感じました。参加されていた委員いかがでしょう。

委　　員：見せていただいて、こんなすばらしい取組があるんだと、感心をさせていただきました。質問なんですけれども、アシスタントで来ていただいた院生とか大学生は参加してどのような感想を持って帰られたでしょうか。

委　　員：毎回毎回、１年目も２年目も、どのような学びが誰に対してどんな成功例に対してどのような学びがあったのかということをデータにして、それを取りまとめインパクトレポートに繋げているわけでございますけれども、１年目の後でやはり大学生のデザインコーチたちに与えた影響がやはり大きかったというふうに感じましたので、本年度はデザインコーチさんに対しても、フォーカスグループを行ってデータを収集しているところでございます。インパクトレポートもすぐまとまりが京丹後市の教育委員会の方に送らせていただくことになると思いますけれども、その中にまとめを見させていただく予定でございます。学生さんだけ、中高生だけではなくて、大学生に与えた影響も、デザイン思考というものを、曖昧さの中で協力をし、みんなが正解のない状況の中で、人を中心に発想したときに、「チームがこれでいいんだ」と、「これが多分この人に対して私たちがエンパシーを使って出す回なのだから、きっとこれでいいんだ」とチームが落とし込んで出したプロトタイプ発案というものが、いらしてくださったユーザーさんやパートナーさんに感銘を与えられるんだというプロセスを見た。大学でSTEMを学んでいる学生さんたちが受けた印象と、影響というものは、私たちが想定している以上に大きいような気がしております。それを通じて、Sea Labo が大学で学ぶ STEM 人材を STEAM 人材に変えていったということを私たちはこれから何とかして実施をしていきたいなというふうに考えているところでございます。

座　　長：ありがとうございました。他の委員の方々からご質問やご意見ございませんでしょうか。Sea Labo 以外のところでも結構ですし、それぞれの委員のお立

場とかご専門に関わるところで、もう少し報告書に盛り込みたいというようなことがありましたら、ご提案いただければと思うんですけどいかがでしょうか。それでは最後のところになりますけれども、最終報告案の４０ページのところに、委員の皆様から送っていただいています、京丹後市の関係者へのメッセージとか期待というのをまとめていただいてます。ここに書かれてる内容と同じようなことでも結構ですので、もう最終回ですので、これをご覧いただきながら、各委員の方々が今どんなことを感じておられるかとか、ぜひ今後に向けて、こんなふうにしていって欲しいという期待など、お１人お１人ご発言をいただければなというふうにも思いますし、また、必要であれば相互にご質問とかご意見を交換し合うようなことになってもいいかと思いますので、まずオンラインの方々からお願いできればと思いますが、古賀委員、よろしいでしょうか。

委　　員：本当この新たな教育の検討会を、竺沙座長を中心に皆様と一緒に取り組めて、大変有意義な時間を過ごせたというふうに認識しておりまして、その点について皆さんに御礼申しあげたいと思います。本当に私も勉強になりました。これまでも京丹後市ではかなり先進的な教育を展開されていたかと思いますが、またさらに新たなＤＸ時代にふさわしい学習環境ですとか、また新たな生徒、学生、子どもたちを中心に据えた教育手法が今後展開されていくという報告書がまとまったということで、これは１つの成果だと思いますが、ここがゴールではないなっていうのが私思ってることで、実際には、ここでまとめられたことを実走して、それぞれの学校はもとよりですが、京丹後市すべての方々のご尽力によって教育が展開されて、そして教育を受けた子どもたちが大きく成長して未来を切り開いていくと。そして、京丹後市に新たな活性化でよみがえるというか、新たな未来が開かれるというところが本当のゴールなんだろうというふうに思っております。私は関東や東京の方の教育現場、大学の方の準備しておりまして、この先の実際のスタートについては皆さんと伴走することはちょっとできないんですが、ぜひこの１年にわたる検討会の成果を、本当の意味での実走に向けて、今後新たにスタートを切って欲しい、真のゴールに向けて行って欲しいなといったことを強く願っているといったことでございます。皆さんにご説明いただく前に申し訳ないので

すけど、そのように思っておりまして、同じ教育現場に携わる者として、京丹後市の取組について厚くエールをお送りしたいというふうに思っております。本当にどうもありがとうございました。

座　　長：どうもありがとうございました。では続きまして委員お願いします。

委　　員：皆様この検討会につきまして、貴重な機会をいただきましてありがとうございました。直接足を運ばせていただくときもあり、オンラインでというときもありましたけれども、いろいろなお立場からの発言が活発にされて非常に刺激的な検討がずっと続いてきたのかなというふうに私も思っております。私も大変勉強させていただきました。メッセージの資料の方には、私は生態系というキーワードを載せて書いたんですけれども、この委員をさせていただけることになったときに、やっぱり一番重視したところは、京丹後というまちの生態系を構築し直すという、そこに学びが生まれてくるっていうような、そういうことなのかなと。これは私自身の捉え方の話ではありますけれども、そんな希望を持って参加させていただいて、今回のまとめについても、そのようにいろいろなプレイヤーの方が、それぞれの役割を果たすことで、それぞれのインタラクションの中で学びが生まれてくるような、そういったまちになっていくんだろうなということが確認できたなぁというふうに考えております。今後については古賀委員がおっしゃった通り、まだ絵が描かれただけということだと思うので、実現に向かって本当に応援しておりますということと、生態系は、まち（いわゆる行政単位としてのシーン）は閉じる必要はない、といいますか、我々も関東であったりとかいろいろな学校さんと活動しておりますので、ぜひ外側にいるプレイヤーみたいなところを生態系の一部に取り組んでいただいたりしたら、お互いにとって学びのある、さらに拡張された生態系がつくれるんではないかなというふうに思ったりしておりまして、今後ともぜひおつき合いさしていただけたらなというふうに思っております。ぜひ、このプランの実現完遂を応援しておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

座　　長：ありがとうございました。では次、委員、お願いいたします。

委　　員：事務局におかれましては、もう大変な取りまとめ作業をいただいて、すごくしっかりしたレポートが出てきているなというふうに見ております。ありが

とうございます。メッセージも私もお送りさせていただいて、私も教育現場で少し活動することがあって、学習者の皆さんの自己実現のために教師が力を尽くすというのが、とても重要かなと思うんですけれども、時代の変化がすごく激しいので、とりわけこの生成ＡＩみたいなものが出てきて、私はこの会議には、きっとＩＣＴの知見をっていうことで呼ばれてるんだなと思ってそういうコメントいっぱいしてきたつもりなんですけれども、これで終わらなくて、今後もいろいろとおつき合いさせていただく大前提で、さらにこの生成ＡＩがもっともっと社会に定着していったときに教育京丹後としてやるべき教育がどんなものかというのは、引き続き考えていきたいなって思うのと、学校環境のネットワークとかいろいろお話したんですが、それはコンピューターネットワークだけの話じゃなくて、学習者同士の繋がりとか人と人とのネットワークっていうのが、とてもとても重要だと思ってまして、ＧＩＧＡスクールって実は私が文部科学省で名前付けたんですけど、ＧＩＧＡスクールネットワーク構想って最初名前つけたんですね。それはコンピューターネットワークだけじゃなくて、教室の中の子どもたちがネットワーキングを上手に張っていくっていうことを意図してたんですけれども、文部科学省でも「さすがにちょっと長いですね」と言ってＧＩＧＡスクール構想っていう名前になったんですが、真髄はネットワークで、子ども同士がネットワークを張って欲しいなと思ってるんですね。期待することとしては、ここでこういう環境の中で学んだ子どもたちが、大人が用意しなくても、京丹後の出身者としてネットワークを上手に張って、社会に出て都会で働く子もいれば戻ってくる子もいて、ずっと京丹後でネットワークを張り続けるっていうことが大事で、それを何かまた教育委員会で作りましょうということになると、大人が作っちゃう世界になるんで、京丹後で学んだ子は、自立的に自発的に自分でネットワークを京丹後の仲間と張り続けるっていうふうになったら、これが成功なんだなと思って。まだ少し遠隔特例校教育の場面でもおつき合いさせていただきますので、引き続きよろしくお願いします。どうもありがとうございました。

座　　長：では委員、お願いいたします。

委　　員：本当に皆さん、1年間大変お世話になりましてありがとうございました。メッ

セージの方には、人材のサイクル構築をするための地域人教育のすすめについて、漫画入りでちょっと載せておきましたけど、私の要望としましては、ロードマップを３７ページに挙げていただいてるんですけれど、これからどういうふうにやっていくかっていうことだと思うんですね。先ほどからも出ておりますように、最終案のまとめをすることがもちろん検討会としての役割ということになって、そのあと受けて、京丹後市の方でこれをどういうふうに実現されていくかということになっていくわけだとは思うんですが、先日メールで、検討委員に対してこれからアドバイザーとして京丹後と縁を持ち続けて欲しいという話があったと思うんですけど、もしそうであるとすれば、私の要望としては、アドバイザリーボードみたいなものを立ち上げるかどうかはこれからかもしれませんが、それはやはりこのロードマップをどこまで実現できているか。そしてそれをどういったかたちにしていくかという、まさに評価、ＰＤＣＡサイクルにおけるプランはこの最終案としてあるとすれば、リードをするのはもちろん京丹後市なんですが、そのチェックをどういうふうにかけていくかという中で、そうした検討委員の皆様方がもしアドバイザーになっていくということであれば、そこで関わらせていただくというのがいいのではないかというふうに私は思います。チェックをちゃんとかけて、その次のアクション、改善をどう結びつけていくか、ＰＤＣＡをまわしてはじめて、おそらくこの最終案のロードマップが、実際に血の通ったものになっていくんではないかというように考えるところでありまして、これは別に最終案にそこまで書けということは申しあげませんけれど、現実の話として持っていて欲しい。特に中高連携のところはそれをやってかないと、おそらく回ったかどうかというものが表に見えてこない可能性もありますので、私としてはぜひＰＤＣＡを回せるような、そういった仕組みというものを今後ぜひ作っていっていただきたいということを申しあげて、私からの意見とさせてだきます。ありがとうございました。

座　　長：では続きまして委員お願いいたします。

委　　員：ありがとうございます。私からコメントというと、本当にもう感謝の２文字しかないんですけれども、教育の現場を変えるのは難しいっていうのはもう本当に様々な専門家や実施者の方が口にされることなんですけれども、そん

な中、京丹後という場所は「リーダーのビジョンと、それを支える人々のコミットメントさえあれば、新しい人材育成というものは今の日本で可能なんだよ」っていうことを本当に見せつけてくれたように思っています。その Sea Labo を通じて、様々な方と一緒に働かせていただいておりますけれども、連携をさせていただいた人材のおひとりおひとりが、それぞれの立ち位置で様々にリーダーシップというものを見せてくださっていると思います。京丹後の方たちが、また集めてこられたここにおられる委員の方々から、私は検討会を通じてこの 1 年間さらに大きく学ばせていただいたことに、本当に感謝しかありません。Sky Labo のチームにとっても、私自身にとっても、おそらく日本の将来世代の育成に思いを馳せるすべての方たちにとって、もしかすると京丹後という場所はパワースポットなのではないかと思っています。本当にたくさんのインスピレーションとリスペクト、もう尊敬せずにおられないという気持ちを巻き起こしてくださっているこの京丹後。このまちとの一期一会を今後もぜひ大切にしていければなというふうに思いを強くしておりまして、その感謝の気持ちをメッセージと変えたいというふうに、切に思っているところでございます。本当に貴重な機会を 1 年間ありがとうございました。

座　　長：どうもありがとうございました。では途中からのご参加でしたけれども、委員のメッセージをいただいてよろしいでしょうか。

委　　員：皆さんこんにちは。遅れて大変申し訳ございません。1 年間、私自身も様々な角度から勉強させていただきまして、本当に感謝の念が絶えません。私自身が実際に学校現場でずっと働いてきた身分なので、皆さん方の教育政策とかもっともっと川上の方からの実践の方法とか、大きな視点からこうやって物事を考えると、大変僕自身も影響ありますので、一応今年で図式はでき、ロードマップみたいなものができたんですけども、これから実際に肉付けしてくっていうところがかなりこれから労力がかかるところでございますので、そこら辺に関して私が実際に今までやってきたことを、お力になれるんじゃないのかなと思ってます。皆さん方と一緒にこれから引き続きこれを実際にひとつひとつの形にしていくのを本当に楽しみにしてますので、私自身が大学で教えると同時に、アメリカの生成ＡＩの会社で働いてますので、その辺

のトレンドが実際どうなってるのかっていうことも皆さんと知見を共有ことできると思うんですし、実際にこのテックが発達すれば発達想定よりやっぱり人間臭い教育ってのがすごい必要になってくるというところがございまして、私自身がその目線に合わせまして子どもたち自身がそもそも学ぶことが好きなのかってところが、これから考えていかなければいけないところで、今までのエドテックとかの歴史を振り返ってみますと、やっぱり学校教育は結構管理教育で、それでテクノロジーが後押ししてさらに管理教育になってきて、それからＡＩになってきたときに何が必要なのかっていうと、やはり子どもたちがそもそも学ぶことが好きなのか、学ぶことに対してどう思ってるのかっていうことをやっぱり本当に問い詰めて考えていかなきゃいけない。そこが学ぶ楽しさを持ってる子と持っていない子の差が、これから本当に天文学的な差になってくると思いますので、その辺を学校教育関係者だけじゃなく、保護者の方や京丹後で働く方々、京丹後に関わる人々すべての方々と一緒に考えていけたらなと思ってますので、メッセージの最後に書きましたけども education is everyone’s business って書いてるように、教育は学校だけの仕事じゃなくてみんなの仕事ですので、ぜひ手を取り合って一緒にやっていければなと思ってます。これからもよろしくお願いします。

座　　長：はい。どうもありがとうございました。ではオブザーバーでご参加いただいてる方にもご意見をいただこうと思うんですが、田中オブザーバーいかがでしょうか。

委　　員：自分もずっと学校現場にいたので、正直自分の学校とか目の前の子どもたちのことばかり考えて仕事をしてきたんで、今年度局っていう立場になって、京丹後の取組に参加することができて、いろんな広い視野で、立場も変わって、目の前の学校とか子どもたちだけじゃなくて、京丹後或いは丹後全域、そういった辺りの視点で教育っていうのを考える非常に重要な勉強の機会になったと思います。局として、先ほどちょっと話題にもなってました中高連携っていうのをどう繋げていくか、それもこれからいろいろと考えてやっていかなあかんところかなと思いますので、そういう意味で、局として何とかいろいろなかたちで力になりたいなと思いますので、何ができるかは実際やってみないとわからないですが、そういうあたりで何とか力を発揮できれば

なと思いますので、今後ともよろしくお願いします。以上です。（田中オブザーバー)

座　　長：はい。どうもありがとうございました。また、委員にご参加いただいてるんですけど、ちょっとご体調が悪くて声が出せないということでしたので、またメール等でメッセージいただければありがたいというふうに思います。それではこの会場におられる委員の皆さん方からも、ご意見いただこうと思いますが、委員、お願いします。

委　　員：はい最初お話をいただいたときは、「何故私が」と少し思ったんですけども、子どもの後押しもありまして、やる限りは何とか最後までしっかり務め上げたいなと思って、最終回を迎えることができましたが、何せ教育の専門家ではないので、どこまでお役に立てたかわからないですけども、本当にたくさんの学びがあって、参加させていただいてよかったなっていうふうに今思っております。Sea Labo の映像とかも見せてもらって、普段小・中学校に立ち入ることもあるんですけども、普段見れないような生き生きしてる姿も見せていただいて、京丹後市の子どもたちもまだまだいろいろな力を持ってるんだなあということもわかりましたし、ただそう言ってもやっぱりまだ一部かなとも思いまして、私も中学生の子どもがおりますけども、「こういうのあるけど行ってみたら」とか「やってみたら」って言っても、「面倒くさいし、いいわ」とかやっぱりついそういうふうに言ったりするところがあります。でもやってみれば、すごく楽しかったとか、いろいろと身についたと多分なると思うんですけど、なかなかそこに辿り着けないところがあるので、こういう取組をみんなができるように、教育現場や学校で少しでもあったらいいなあというふうに思ったりすればと。先ほども話があったように、何のために学ぶのかっていうことが、やっぱりまだテストのための勉強みたいなところがあるなというのも子どもを見ていても感じるので、その学ぶことによってどうなるのかっていうことが具体的にもうちょっと見えていくような教育になれば、子どもたちももっと主体的に学んでいくのかなと思いました。私はやっぱり教育の専門家ではないのでわからないこともたくさんあったんですけど、いくら教育が充実してもそこに辿り着けない子どもがいる現状もあるかなと思いますので、やっぱり基本はまず家庭かなというふうに思います。

私は家庭でも仕事でも、みんなが安心して暮らせるまちづくりというのを、私は私でそこを頑張っていきたいなと思いますし、引き続き教育委員会の皆様たちには教育の面でご尽力いただけたらと思っております。ありがとうございます。

座　　長：ありがとうございました。委員お願いいたします。

委　　員：残念ながら準備委員会には参加はできなかったんですけども、今年度になって検討会に委員として参加させていただいて、そして委員の方々からいろいろご意見を聞かせてもらうその中で、学校現場だったらどんなことができるかな、どんな工夫や改善をしていかなくてはいけないかなってことを考えることができただけでも、大変私にとっては学ばせていただいた検討会だったというふうに思います。Sea Labo の話が出たところで言わせてもらってもよかったかもしれませんが、今年度本校から４名の生徒が、Sea Labo に参加させていただきました。その中の１名は、生徒会の給食委員の委員長をしておりまして、Sea Labo に参加し終えた２学期からの彼と、１学期のときの彼の姿に大きな変化を感じたんです。委員長なので委員会活動を中心として、いろいろな各学級からの委員の意見を聞きながら、今までない取組、そして今まで気づかなかった視点で、委員会の取組を彼が中心になって進めていった。学校では、「一皮むけた、なんか成長したね」っていう、そんなふうな感想を感じたところです。おそらくそれはうちの生徒だけではなくて、Sea Labo に参加した中学生や高校生が、参加した後のそれぞれの学校生活の中で、その生徒なりに大きく成長していったり、周りとの関係を築いたり、自分の学校生活を盛んにしていってるんじゃないかなというふうに思いました。やはりそれだけの大きな力が Sea Labo にはあって、ぜひ参加した子どもたちの、3 年後の高校生活での様子や、5 年後の大学生となったときの生活や、それから実際に仕事を手にして、職場の中での生活や子どもたちのその後のすごく成長した姿が楽しみだなっていうことを感じましたし、その子たちがまたネットワークを広げて、同窓会的なかたちで集まってそれぞれのまた成長を確かめ合う、そんなことができたらすごくいいなというふうに感じたところです。それから、Sea Labo に午前中に見学に行った教員が、午後からは校務に着く予定だったんですけども、Sea Labo の楽しさを味わったところ、午後からの

仕事を次の日に回してでも見学し、一日中いたということを聞かせてもらいました。そういう教員が、ぜひデザイン思考の広がりであったり、ここの学校の現場の先生に向けてのメッセージの中にあるように、子どもたちの学ぶ意欲を高める声掛けのコーチングだったり、ファシリテーターであったり、プロデューサーであったり、そういうスキルを磨いていくようなそんな機会がさらに広がっていって、またそれは学校現場の子どもたちの育成に繋がっていけばいいなっていうことを大変感じてるところです。ただ、子どもたちが生活してるのは学校だけではないので、家庭や地域との連携の中で、ぜひ京丹後市独自の教育が今後広がっていけばいいなと思いますし、ぜひ広げていきたいなというふうに感じたところです。いろいろとお世話なりましてありがとうございました。

座　　長：どうもありがとうございました。では委員お願いいたします。

委　　員：検討会の方に、委員として参加をさせていただいて、もう本当素晴らしい委員のご発言、ご発想、いろいろ聞かせていただいて、自らの学びの足りなさを本当に実感しながら、勉強しないといけないなということを感じさせていただきました。またいろいろな発言等を、それこそかたちにするといいますか、素晴らしいまとめにされた教育委員会のスタッフの皆さんの力が本当素晴らしいなということを感じるとともに、京丹後市教育委員会の熱を非常に感じました。本当にこうやって作られたものを、やはり高等学校としてもしっかりと受けとめて、これからの学校の特色づくり等に生かしていく必要があるかなということを強く感じることができました。ちょっと話が全然違うんですけれども、今、いろいろな企業や職場が人手不足ということがどんどん進んで、報道されています。これまで学歴社会といいますか、とにかくよい大学に入ったら良い職場につけて、人生が幸せになるんじゃないかというそういう流れがあったと思うんですけども。もしかすると、最後の「良い会社」の入口というのが大分こうハードルが下がってくるんではないかなあというような、そんな社会になっていくのかもしれないなって感じています。そうなったときに、実は入ることよりも、中に入ってから活躍できる能力とか、力を身につけていくことの方が、実は学校教育として、これからもっともっと必要とされることではないかなっていうことが、だんだん感じられる

ようになってきました。実は、この土日に大学入学共通テストがございました。非常に難しい問題が出されていて、高等学校としては、もう少し簡単な、一問一答とまでは言いませんが、問題を見たらパッと答えが出てくるような、そういう問題にしてくれというような思いもあるんですけども。本当にしっかりと考えて筋道を立てて解いていかないと答えに辿り着けないという、そういう問題に変わってきました。また新課程になるとさらにそれが進むんじゃないかと言われてるんですけども、それはやはり大学の方も、そういう人材を取っていかないと、これから立ち行かなくなってくると。それはやはり、回り回って社会がそういう人材を求めているのかなっていうことを、入試を通して感じています。そういう意味で、この在り方検討会議の方向性というのは、きっと単なる理想論ではなくて、本当に現実にこういうことが必要な事態がすぐそこまで来ているのではないか、ということを感じさせていただく良い機会になったというふうに思います。本当に素晴らしいこの最終まとめですけれども、もちろん教育の方向性だけではなくて、保護者や地域がこの内容をしっかりと広報を通して受け取っていただいて、やはり保護者の方が意識を変えていただかないと、多分成功しないのではないかなというふうに思っています。高等学校がこれから、新しい方向に教育改革を進めていったときに、それをやはり肯定的に受けとめてそれを応援しようと。我が子をそこに送ろうと思っていただかないと改革は成功しないと思いますので、どうかそこに繋げていただくような、そういう広報の方もお願いしたいと思います。

座　　長：ありがとうございました。委員お願いいたします。

委　　員：1年間この検討会を通して私もかなり無知なことがたくさんあって、STEAM教育など、知らない言葉がたくさんあったんですけど、この会を通しましていろいろ学ばさせていただきました。親としても企業としても、これから子どもたちとともに成長していける親や企業でありたいとそう感じました。この最終まとめ案を拝見いたしまして、非常にすばらしいものが作っていただけたんじゃないかなと思っております。子どものころに戻って、僕もこんな教育をまた受けたいなと、そんなワクワクするような内容になっているんじゃないかなと思っておりますし、また期待もさせていただいています。また政

策を実行するにあたって、一番負担がかかるのは教員の皆様学校関係の方と思います。我々親としても企業としても、先ほど岡田先生も言われたように、本当に自分ごととして真剣に考えて取り組むべきかなと。そしてもう学校や先生や子どもにもちゃんと寄り添って、一緒に協力して実現していくべきだなとそう感じております。住みよい京丹後市にするためにも、僕らも本当に頑張っていかないといけないなと思いますし、また子どもたちがまたこの京丹後市に帰って来たくなるような、そういうまちに僕らも全力で頑張っていきたいと思いますのでこれからもよろしくお願いいたします。

座　　長：ありがとうございました。委員お願いいたします。

委　　員：僕も上委員さんと一緒で、教育はど素人なので、全然役に立つようなこともないですし、なかなかいい発想も浮かばないのですけど、本当に Sea Labo も含めいろいろ参加させていただく中で、このキーワードっていう部分もそうなんですけど、まずやっぱり保護者が丹後を好きになり、丹後に誇りを持たないとといけないと思います。そういうことを子どもにどうやって伝えていくかっていうことやら、親が本当に丹後を好きにならないとなかなか子どもに伝えられないので、やはりそういうその丹後愛っていうところを育むということが大事だなと思います。本当にこのまとめも素晴らしいと思いますし、これを実践していくのが本当に難しいことだと思います。今年の正月の賀詞交換会の意見を聞いてると、２０５０年には丹後の人口は 3 万人ぐらいになるっていう。日本の人口もとても減るって話で結構衝撃的なとこもあるんですけど、これだけオンラインだとかＤＸも今後進めていく中で、やっぱりこれだけ自然があって、こういう教育がすごく充実していきますと、子育てするのにやはり丹後でっていうことは十分あり得るのかなと思いますし、やっぱりそれで移住者が増えていくっていうことは素晴らしいことだと思いますし、やっぱり子どもに対しての教育っていうのはすごい大事だと思うので、これが実践できて、日本をもとより世界が発信できていきますと、そういう意味でも面白いことになっていくのではと思います。このまとめがまとめだけで終わらずに実践されていくことを、期待もしますし、本当に先生方々が大変だと思いますけれども、お願いしたいというところですし、受入れる企業としましても、そういう意味でも、我々も頑張っていきたいと思ってます

ので、今後ともよろしくお願いしたいというふうに思ってます。余談ですけどこのSea Laboで知り合った子に大の阪神ファンがおられまして、優勝が決まる瞬間までずっとLINEでやりとりしていたということで、そのあとも、英語で発表があるので丹後ちりめんの専門用語を教えて欲しいっていうので繋がったりとかしましてですね、そういう意味でもまたすごい取組もできたかなと思ってますので、本当に楽しい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

座　　長：では私からも簡単にお話をさせていただきたいと思いますけども、本当に皆さんおっしゃいましたように、本当に楽しくこの会議に参加させていただくことができました。皆さん方からも活発に非常に貴重なご意見をたくさん出していただきまして本当に感謝しております。教育委員会から依頼された仕事でこんなに楽しい思いをしたのは初めてですので、本当に貴重な経験になってるかなというふうに思います。また人選も本当によく考えられて、素晴らしいなと思うんですが、個人的にも、こういう会議でなければお出会いしなかった方々ばかりですので、本当にいろいろな刺激をいただきましたし、こんなふうに社会や学校をご覧になってるんだっていうふうなことを、いろいろと感じさせていただくことができて、個人的にも勉強になったかなというふうに思っております。Sea Labo などがその典型かと思いますけれども、この検討会の報告書が出てから始まるんではなくて、もう動き始めてるということが非常に大事なところかというふうに思いますし、特にSea Laboについても、委員のお話のように、やっぱり研究途上で様々な問題意識を感じられながら、さらにそれをバージョンアップするような、そんなことずっと考えて取り組んでおられる。そういうプロセスが非常に重要ではないかなというふうなことを感じました。また、この場に保護者の方や地域の方が委員としておられるっていうことが非常に大事かなと。こうした議論を生で聞いていただいたと。それによって何か知識が得られたとかいうことはないんですけども、そうした議論に触れていただいたと言うことがとても大事なことではないかなというふうに思ってます。私が期待したいなと思うことは、動き始めてるということをいろいろな人に感じ取ってもらいたいなということかなと思います。先ほど委員が中学校での様子をお話いただきましたけれども、

Sea Labo に参加した中学生がもう大きく変わったと。１学期と２学期の間で大きく変わったという、その変化を周りの方々、生徒たちは当然感じているかと思うんですけども、それ以上に教員の方々がどんなことを感じておられるかということがとても大事なことだろうと思います。Sea Labo に参加して一番思ったのは、こうした取組、あるいは生徒たちの様子が、なぜ学校で見られないんだろうかっていうことだと思うんです。いろいろな要件があるかと思いますけども、そのことを学校に関わる方々に感じ取ってもらいたいなというふうには思いますし、また何かが変われば、周りの人たちがそれから刺激を受けて、それに反応していくっていうふうなことが、大きくいろいろなことを変えていく大事なプロセスであろうと思います。そのためには、やっぱり何か変化があったことに対して、周りがそれに反応できる感動を持っておくっていうこと。そこが非常に重要だろうというふうに思います。おそらくこれは人材育成ということで、学校が出発点、プラットフォームになろうかと思いますけども、やっぱりそこが固いかたちでのプラットフォームになってはいけないですので、やはり柔軟になりながら、自然と反応できるようなかたちで進んでいけばいいかなというふうには思っています。生徒が変わってよかったなというふうに、先生方がそれで終わるんじゃなくて、Sea Labo に参加したから、生徒が変わったというところで終わるんではなくて、じゃあなぜ自分たちが生徒たちを変えることでできないんだろうかということを考えてもらいたいですし、生徒の変化に教員が反応できなければ、教育はうまく進んでいかないはずですので、そのことをやっぱり教員の方々に感じ取ってもらいたいなというふうに思っています。やはり Sea Labo で私が一番いいなと思うのは、子どもを子ども扱いしてないところですよね。一人前として見てるからこそ、ああいった取組ができるし、多分変に助けなかったでしょうし、お膳立てもしてなかったはずで。やっぱり一人前として扱ったからこそ、できたことであろうと思います。おそらく学校は子どもを子ども扱いしている場所になってるからこそ、子どもは面白くないんだろういうふうにも感じますので、多分そういうところの変化を、学校に関わる方々が感じてくれると非常にいいんではないかなと。もちろん家庭もそういうところがあるかと思いますけども、そういうところを感じ取ってもらいたい、生徒

たちの変化から感じ取ってもらいたいなっていうふうに、Sea Labo に参加して私が一番感じたところでもあります。ですのでこの報告書をもとに、おそらく条件整備とか環境整備ということになってきますけども、様々なことを作り上げながら、でも箱物とか仕組みを作るだけでは、多分何も始まらないことになりますので、そこに関わる人たちが、日々、いろいろなことに反応できる、いわゆるセンスっていう言い方もできるかもしれませんけども、そういう感覚を豊かにしていくことが大事だと思いますし、多分豊かになっていくはずですので、そういったことを私は期待したいと思っています。私も京丹後市に多分１０年ぐらい関わらせていただいてるかとは思いますけども、今後もこういうふうな刺激をいただけるということを非常にうれしく思っていますし、私の立場でいろいろなかたちで関わっていきたいと思っているところです。本当にこのような機会を皆さんのおかげで提供していただき、またそういう場になったことに感謝をしたいですし、座長として大変うれしく思っているところです。本当にありがとうございました。では委員ご発言よろしくお願いいたします。

委　　員：第 1 回の準備会の際に竺沙座長がこうおっしゃいました。「子どもたちの未来を話すこの場に子どもたちがいないことを私たちは忘れてはいけない」と。そのコメントを伺ったときに、その座長の教育者としての哲学を見た思いがして、非常に深く共鳴いたしまして、この座長のもとでしっかりとした議論をしていきたいな、というふうに初回で心から思ったことを昨日のように覚えています。竺沙座長の存在自体が、この検討会の背骨のようになって、高い議論の質に繋がっていたように思いまして、最後に本当に心からの感謝を申しあげたく、発言をさせていただきました。ありがとうございます。

座　　長：過分なお言葉いただきましてありがとうございます。何か全体を通じて最後に発言したいというふうなことがございましたら、ぜひご発言いただきたいと思うんですが、いかがでしょうか。この会議は今日が最終回ですけども、多分この関係はこれからも続くだろうというふうに思います。一同に集まることはないかもしれませんけれども、またお願いしたり、いろいろなところで関係ができるかもしれませんので、そういったことを楽しみしたいと思いますし、また京丹後市がこうした議論ができたということを、ぜひ生かして

いただき、今後の発展をお祈りしたいなというふうに思っております。では一応、審議としては以上で閉じたいというふうに思います。委員の皆さん本当にどうもありがとうございました。では、その他のところに行きたいと思います。まずは、事務局の方からご提案いただくということで教育長お願いいたします。

教　育　長：皆さん、準備会から８回の検討を一年間にわたり丁寧に検討いただき本当にありがとうございました。今皆さんから熱い思いを聞かせていただきましたし、それから計画は計画で、まだ何も始まっていないというところのご指摘も受けてるとこだと思いますし、私もその通りだというふうに思ってます。動き出していることはありますけれども、そうは言ってもまだまだ計画の段階のところを丁寧にご議論いただいたということで、ここから私たちが２０２４年度にどう具体的にしていくのか、さらにはどう連携しながら、学校現場と理解を共有しながら実際に進めていくのかというところが、本当に重要になってくるのではないかと思ってます。来年度は教育振興計画というものも新たにですね、こうした検討会の最終まとめも踏まえたり、それからまだ教育大綱というものについてもこのまとめを十分踏まえた上で、方向性を作っていきたいなというふうに思っております。ただ、そういう中におきましては先ほど委員の皆様からも、言及していただきましたように、教育の様々な専門性と深い知見を持った委員の皆様方のご協力やご指導助言もまだまだいただきたいという思いも本当に持っております。先ほどご挨拶の流れの中にもありましたけども、京丹後市としてはアドバイザリーボードというようなことの設置を考えておりまして、具体的にはまた詰めていくことになりますけれども、またご協力いただける委員の皆様がおられましたら、そういうかたちで、指導助言をいただきながら、先ほど委員の方からもありましたように、具体的にどんな取組が動き出していて、どういう効果があるのかというような評価のご指導やご助言もいただけたらというふうに思っております。今後ともよりよい関係の中で、皆様方と子どもたちのための教育を進めていきたいというふうに思いますので、そうした辺りのお含みをいただけたらということでご発言をさせていただきました。ありがとうございました。

座　　長：ただいま教育長からご提案がありましたアドバイザリーボードの設置ということにつきまして、もう少し趣旨等説明を聞きたいとか、或いはご質問ご意見ありましたらご発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。関わっていただける委員の皆さん方は、なっていただければと思いますし、またそこに入られない方も、それぞれの立場で関わっていただけるものというふうに思いますので、今後に向けても、委員の皆さん方に、京丹後市にどんなかたちでも結構ですので関わっていただければありがたいなというふうに思っております。今後のこの最終案の進め方等、どういうスケジュールでどんなふうに、京丹後市で公表されることになるかとか、その辺の見通しを、ご説明いただいてもよろしいでしょうか。

事　務　局：今、竺沙座長からありましたように、本日のまとめを整理させていただきまして、予定では１月２２日の月曜日に、京丹後市の総合教育会議で報告をしてご承認をいただくというような流れで考えております。それを経まして、１月２９日月曜日に京丹後市の１月の定例記者会見がございますので、その中で発表していくというようなことで考えておりますのでご報告をいたします。そうしましたら１月２０日の月曜日までのところで、誤字や少し抜けてるとか、わかりにくいとか、そういう細かいところでお気づきのことがありましたら、事務局の方までお知らせいただければありがたいというふうに思います。今月末に京丹後市全体に公表される、或いは全国に向けて公表していくということになると思いますけども、そういうことを委員の皆さん方もご承知いただければありがたいというふうに思います。いろんな反響があればいいなというふうに思います。今後のことも含めて何かご質問とかご意見ございませんでしょうか。では、以上で今日予定してました議事を終了したいと思います。

（２）その他

事　務　局：２点ほど事務局から連絡を追加でさせていただきたいと思います。本日お配りをさせていただいております資料の方なんですけれども、1 つは画面共有しておりますように、今回この検討会の議論を踏まえまして、今報道発表資料を映しておりますが、「世界に最も近い人材の育成に挑戦。京都府京丹後

市の子どもたちのワクワクから始まる学びの変革プロジェクト」ということで、こちらは１２月１５日に発表したものですが、新たな取組を進めていくために財源確保が必要となって参りますので、ここに書いておりますような内容で、ただいまクラウドファンディングをもうすでに始めております。１２月１５日から３月１３日まで行っておりますので、お知らせご報告をさせていただきます。またお時間のある時にご覧いただきまして、委員の皆様にもし関心を持っていただきましたら、ご寄附いただけるとありがたいなというふうに思っております。それともう１点なんですけれども、教育フォーラムのご案内です。今度の日曜日１月２１日、日曜日にアグリセンター大宮で京丹後市の保幼小中一貫教育の報告のためのフォーラムを開催いたします。こちらは委員としてお世話なっておりますヤング先生にオンラインではありますがご登壇をいただきまして、Sea LaBo のことを中心に、探求的な学びや STAEM 教育などについてご講演をいただくこととなっておりますので、こちらもお時間いただきがありましたらご参加いただければというふうに思います。事務局からは以上でございます。竺沙座長、本日は進行どうもありがとうございました。委員の皆様の最後に、大変貴重なコメントをそれぞれいただき感謝申しあげます。それでは以上をもちまして第６回の検討会終了させていただきます。最後に松本教育長より閉会のご挨拶を申しあげます。

教　育　長：先ほど申しましたように、1 年間にわたりまして委員の皆様には本当に公私ご多忙の中、この検討会にご参加いただき、貴重なご意見をいただきましたことを心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまをもちまして最終まとめというかたちで、未来を感じさせるまとめができたんではないかなというふうに思ってます。話は変わりますが、大谷翔平選手より日本中の小学校にグローブを寄付していただいたものが京丹後市にも届きまして、本当にすてきなプレゼントをいただいたと思ってるんですが、その大谷選手も、野球をしている子どもたちが少ないと。だからもっと子どもたちに野球を楽しんでもらうきっかけづくりとして、グローブを寄付してくれたんだというふうに思っていますけれども、私たちもそうした子どもたちがよりよい教育をしていく上でのきっかけづくりとして、この検討会でのまとめを使わせていただきながら、先生方や、関係者、それから保護者、それ

から企業の方々とも協力しながら、子どもたちのよりよい夢の実現のために、これからも進んでいきたいというふうに思いますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。結びに当たりまして委員の皆様のますますのご活躍を祈念しまして、閉会のごあいさつとさせていただきます。1年間本当にご苦労さまでございました。ありがとうございました。